

暖冬

今年世界的に暖冬傾向にあるようだが、先日訪れた中国奥地のウルムチも例外ではなかった。朝晩は氷点下十五度にも達し暖かな京都の冬に慣れた身体にはこたえたが、人びとはずいぶん暖かいといていた。温暖化がこのまま続くと砂漠化にも拍車がかかり、そうすると黄砂の害もひどくなるのではないかと懸念する人もいた。京都にいれば黄砂など春の季語くらいにしか思われていないが、ソウルでは黄砂のひどい日には飛行機の離着陸もできなくなるという。日本でも九州あたりでは車のボディーやフロントガラスが汚れて、しょっちゅう洗車しなければならなくなっているようである。

温暖化がすすむと、日本にも、それ以上の深刻な影響が出る。マラリヤが流行するとか、コメができなくなるという予測まである。温暖化で熱帯原産のコメができなくなるというのも不思議な気がするが、コメがなる時期を決める大きな要素は、その土地の緯度、つまり昼間の長さである。温暖化が進むとコシヒカリはじめどの品種もその適地は北上し、そうすると北海道がコシヒカリの産地になりそうな気がする。

しかし夏の北海道は昼の長さが長く、コシヒカリの開花の時期は秋の彼岸近くまで遅くなる。いくら温暖化するといってもこの時期の北海道の気温はコメの成熟にはあまりに低い。というわけで、北海道のコシヒカリ産地化の夢ははかなく消えてしまう。

同じ原理で、温暖化にあわせていろいろな作物の品種を作りかえる必要が出てくる。それも緊急にである。京野菜のいくつかも深刻な打撃を受けることになる。農業の分野でも温暖化は深刻な影響を受けるのだ。それならばと、昼間の長さや温度をコントロールできる巨大温室で作物を作ろうというアイデアもあるようだが、それでは化石燃料の消費が増えて、逆に温暖化を加速させることにもつながる。やはり温暖化はその根を断つしか解決の道はないようだ。

こうなると個人のレベルでできることはあまりなさそうに思えるが、案外そうでもない。せめて夏の都市熱くらいは下げられるのではないか。例えば京都市内のマンションやオフィスの南向きのベランダにアサガオの棚かバケツイネ（バケツで育てるイネ）をおいてみてはどうか。市役所が音頭を取り各小学校のPTAが協力すればできるのではないかと私は思うのだが。朝、たっぷりの水をやっておくとアサガオやイネによる水蒸気で気化熱が奪われ、温度が下がる。田んぼの上を渡る風が冷ややかになる、あの原理である。そうすれば、町全体が発生させる都市熱も下がり、ひいては空調に使われるエネルギーも多少は減って、ささやかな二酸化炭素排出削減にもつながるように思われる。

佐藤洋一郎、現代のことば（京都新聞 2007・2・28）